

しては鶴は少し大き過ぎ、白鷺か白鷄が丁度似合ひであるが、蘿窓の今の場合はその外隈がまだ明けやらぬ残んの闇をさへ暗示する力となつて愈々面白い。鶏冠に加へた赤の薄色は牧溪が大徳寺中觀音左右猿鶴に於ける丹頂と同工で、畫中唯一つの色を留めて居るが、これも鮮かに「東方の精色」を反映する働きとなつた。季節は秋冬でなくて春夏の候であらう、所謂鶴膝の雙幹に支へられつゝ雀爪相依る竹の葉にさすがに嬋娟の姿があり、地面の上にも落葉の散るを見ない。唯この竹の葉を宋元墨竹法の蹊徑に逍遙する幾多名家の作に較べて見ると、如何にも「筆法麤惡、古法無くして雅玩に非ず」と言つた牧溪一派に對する支那鑑畫者流の批評を是認せねばならなくなるが、それだけ自然に忠實に且つ親しみも多いといひ得る。土坡の描寫などにも無論牧溪を追ふ所がある。終に臨んで、淺野侯が特に新春を飾らんとするわれらの請を容れ、今や天下に一作を數ふるのみなる蘿窓の名幅をわざ／＼廣島から上された好意を深く感謝する。(協本)

### 三 傳高然暉筆 夏冬山水圖 京都 金地院藏

掛幅 絹本墨畫 各竪一・二五三米 横五八・四糧  
(協本十九郎「高然暉に就て」参照)

### 四 頰燒阿彌陀緣起 神奈川 光觸寺藏

卷子 紙本著色 竪 三五糧  
(熊谷宜夫「光觸寺阿彌陀三尊像と頰燒阿彌陀緣起」参照)

### 五 木村探元筆 歸去來圖 東京 伯爵 渡邊昭氏藏

掛額 紙本墨畫 縱七〇・六糧 横一・二七米

木村守廣は薩摩の人。探元齋と號し、法橋に敍せられ、大貳の稱を賜はる。青少の比狩野探信の門に遊び、深く探幽の迹を慕ひ、後年更に雪舟及び高然暉を學んで得る所があつたと云ふ。明和四年に生れ、享壽八十又九を以て延寶七

年に鹿兒島に沒した。その間京洛江都に出づる事纔に數度、累計するも數年を出でず、殆んど終生を南陲の僻地に送つた。著はず所白鷺洲、三曉庵主談話等あり、就てその爲人と諸藝に關する識見とを見る事が出来る。

今當時の畫壇を顧るに探幽出で、狩野の畫風を確立して以來、贅を狩野家に執る者は滔々として師風に拘泥し、個性を沒却するも尙只管にその格外に逸出せざらん事を願ふのみであつた。探元固より狩野の臭味を蟬脱し得た者ではないが、少くも筆あつて意なき卑俗味と、個性を滅却し、或は歪曲したる不自然さとに充ちた作畫を事として恬然たりし時流の凡庸畫家とは自ら選を異にし、勁健なる筆致と溫藉の氣分とを兼ね具へて能く一家の風格を示してゐる事は、獨り當代のみならず、實に探幽以來屈指の一人であると云ふ事が出来やう。

今収載する所の一作。高士輕舟に駕して歸る。僮僕は歡び迎へ、稚子は門に候つ。之れ云ふまでもなく陶隱居が歸去來辭を描くもの。やゝ蠹蝕を存するも敢て畫品を損ふには至らない。好んで焦墨を用ひて圖をなし、前面の岩塊に微褐を刷くのみ、漂渺たる神韻に乏しき憾はあるが、謹恪勁拔の筆力を見るべく、能く浮華の氣を去つて穩健なる畫品を示してゐる。傳へ云ふ、探元畫蹟中三曉庵靜隱の款を識すものはその會心の作に係ると。此畫正に「三曉庵靜隱老拙時年七十歲」と署し下に大印一顆、文に「在家僧靜隱壹號虛中」(縱四四糧、横四三糧)とあるものと、小印一顆、文に「淨名第壹流」(方一八糧)とあるものを押してゐる。白鷺洲によれば彼の作畫生活は實にその十三歳の時に初まり、又今日八十八歳の年齢を署したる畫蹟の傳存する所を以て見れば、殆んど終生彩管を絶たなかつたのであるが、此作の如き、頰齡七旬にして未だその筆力に些の澁滯と衰弱とを見せず、最も渾熟老健なる代表的佳作の一に推す事が出来やう。(正木)

### 六 醉翁亭圖盆 神奈川 圓覺寺藏

堆黑 徑三四・一糧

(正木直彦「醉翁亭圖盆」参照)